


 ざいそう

誰か故郷を想わざる



熊谷 勝弘

JASRAC 出 1114994-101

バブル崩壊後失われた10年といわれ、効果的な経済対策もないままさらに10年が過ぎ、政治の弱体化による政権交代もつかの間内政外交ともに世界の嘲笑に甘んじる状態となったところに3.11の東日本大震災が発生しました。

一瞬にして、人々は家族親兄弟姉妹、同胞、家財、田畑とともに故郷を失ってしまいました。

表題は、作詞・西条八十、作曲・古賀政男、唄・霧島昇による昭和15年の大ヒット曲です。

1. 花摘む野辺に日は落ちて
みんなで肩を組みながら
唄をうたった帰りみち
幼馴染のあの友この友
ああ誰か故郷を想わざる
2. ひとりの姉が嫁ぐ夜に
小川の岸でさみしさに
泣いた涙のなつかしさ
幼馴染のあの山この川
ああ誰か故郷を想わざる
3. 都に雨の降る夜は
涙に胸もしめりがち
遠く呼ぶのは誰の声
幼馴染のあの夢この夢
ああ誰か故郷を想わざる

奇しくも、霧島昇氏は福島県双葉郡大久村（現いわき市大久町）の出身で、小学校を卒業した後上京し苦学して東洋音楽学校（現東京音楽大学）を卒業、コロンビアに所属し数々の歌史に残る唄を残しました。

いわき市には表題の歌碑が建てられています。

私は、唄を求められる時は必ずこの歌を唄うのが常です。

特に、1番の歌詞“幼馴染のあの友この友”，と2番の“ひとりの姉が嫁ぐ夜に”の節に来るところえきれずに涙してしまう始末です。

昭和20年生まれの私にとっては、物心がつきラジオ以外娯楽のなかったころ巷に流れていた曲でありました。

昭和6年満州事変に始まり、昭和12年支那事変が勃発やがて日中戦争へと拡大し長期化の様相とともに、成年男子の出征が相次ぎ、労働力不足とともに生活物資の困窮に対し昭和13年国家総動員法が発令され、あらゆる物資の生産価格配給と統制が設けられました。

昭和16年大東亜戦争へ突入、広島、長崎と無差別な原子爆弾による悲劇、戦死者約180万人、民間人約40万人の犠牲者を出し昭和20年ポツダム宣言をうけ

敗戦となりました。

ゼロからの復旧復興のもと今日にいたるは記すべくもありません。

戦時中、立場はいろいろあったにせよ祖国のため家族のため異国において目的遂行のため従事しておられた多くの人々にとり何時の日か故郷に帰ることが最大の希求ではなかったでしょうか。

しかし、ほとんどの方々は二度と故郷を踏むこともなく、故郷に帰ることもなく異国に没し、いまだ亡骸も帰ることなく荒野に眠っております。

昭和21年から昭和37年にかけて、ラジオで「尋ね人の時間」が放送されていました。幸い私の家族に尋ね人はいませんでしたが、子供ながら肉親と会えない人々がたくさんおられるのだと聞いていたのを思い出します。

ラジオしか楽しみがなかったころ、落語や浪曲、NHKの新諸国物語に家族で耳を傾けた時代でした。現在のように物の豊かではなかったあの頃のほうが家族愛、躰、礼儀作法、親を想い子を想う心が通っていたと思われます。

途上国をはじめ先進国を巡り歩いた体験から世界広しといえど日本ほど豊かな緑と豊富な水に恵まれた美しい国は他にないと信じております。

津軽弘前は私の故郷ですが、激変し小学校は統廃合でなくなり、中学高校の学び舎は昔日の面影もなくなりました。

祖母父母妹と暮らした家屋もなくなり、城下町であった代官町、紙漉町、銅屋町、桶屋町などの風情もすっかり変化しなつかしい思い出をたどるものなど何もない有様です。せいぜい、岩木山と城跡、茂森の寺町ぐらいでしょうか。

それでいながら、青森から奥羽線の各駅停車の列車に乗り、「きたときわ」、「ないじょうし」と過ぎ、津軽平野に岩木山の山影が見えるころ、なぜかあの三味線の音が脳裏に錯綜し、目頭が熱くなり思わず涙がこみあげてきます。

昔の面影もない駅のホームに立つと、父、母が「カツやよく帰ってきたな」と迎えに来ているような錯覚に襲われます。

この度の大震災で全てを失い、且、放射能により帰ることもままならぬ方々に対する言葉もありません。が、故郷とはこの様なものではないでしょうか。

私は、生涯この歌を唄い臉をつむることで父母、はらから、遊び歩いた山川、貧しくも楽しかった住屋を想い果てることにしております。